I-OWA マンスリー・セミナー講演より
「子どもと大人のための金融の基礎」

講演：岡本　和久
レポーター：川元　由喜子

1871 年、日本のお金は「両」から「円」になりました。その貨幣制度を決めたのは早稲田大学創立者の大隈重信。彼は、政治家でもあったのでお札の肖像になることは良くないと判断し、とうとう彼の顔にはお札にはなりませんでした。一方、早稲田大学のライバル、慶応義塾を創立した福沢諭吉は今、一万円になっていますね。五千円は樋口一葉ですが、お札の顔に圧倒的に男性が多いのは、男尊女卑というわけではありません。顔に皺が多かったり、ひげを生やしていたりで、偽札を作りにくいからだそうです。

お金が無かった時代、物々交換が始まり、市が立つようになります。が、自分の欲しいものが見つからない時は、とりあえず「みんながいつでも欲しがるものに交換しておこう」ということになり、稲、布、珍しい貝などがその手段として使われました。稲は昔、「ね」と言っていたそうで、そこから「ねだん」という言葉が生まれました。布は「巾」で、紙幣の「幣」にも「巾」が含まれています。中国ではきれいな貝が流通しました。その結果、「貝」扁の漢字には、お金に関係したものがたくさんあります。

世界で初めて鋳造貨幣が出来たのは、紀元前 7 世紀ごろ。小アジアのリディアという国でした。少し遅れて中国でも、紀元前 3 世紀ごろ秦の始皇帝が、金属の貨幣を鋳造したと歴史に残っているそうです。日本では 683 年、中国のお金をもとに富本銭が、708 年には和同開珎が造られました。

時代が下って 1600 年ごろ、伊勢商人の間で山田羽書というのが使われるようになり、それが日本で最初のお札だとされています。江戸時代も後半に入り、貨幣を預かって証文を出す両替商が登場します。その証文が流通するようになり、両替商は明治に入って銀行となるのです。

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com

当初、銀行の発行する紙幣は、銀行に持っていけば金に換えてもらえる兌換券でした。いつでも金になるから安心して使える。金が信用の裏付けだったのです。1882 年、日本銀行が出来て、お金を発行する銀行は一つに絞られました。日銀は持っている金（きん）の範囲でお金を発行していましたが、経済の規模が大きくなっていくと、十分お金が発行できなくなり、世界大恐慌を経て1942 年、日銀券は金と交換できない不換紙幣となりました。

なぜ、金の裏付けのない日銀券が通用するかというと、日銀の発行しているお金は「お金だ」とみんなが信用している、つまりこのお札は相手が必ず受け取ってくれて自分の欲しいものが手に入る、とみんなが信じているからです。日銀の信用に基づいて流通が可能になっているのです。今は電子マネーというものがありますが、これも発行者のところへ持って行けば現金に換えることが出来ると、みんなが信じているから流通するのです。

Bit Coin というのが話題になっていますね。先般、金融庁は、これはお金ではなくてモノである、という判断を示しましたが、モノとお金はどこが違うのか。結局は信用ということなんです。信用されているのが日銀なのか、ネットの中の人間関係なのかという違いがあるだけです。Bit Coin がそのまま世界通貨になるかどうかはわかりませんが、遠い将来、何らかの形で世界通貨ができるでしょう。その時はきっと何かネットワーク的なものが、通貨の信用を担保することになるのかも知れません。

講演はこの後、紙幣の肖像画の話、物価の歴史、ドイツのハイパーインフレの歴史、信用創造のメカニズム、証券の発行市場と流通市場、そしてローン地獄の話、と盛りだくさんの内容でした。最後には、中学生や高校生から寄せられた、お金に関する Q&A を紹介していただきました。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社